The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	堀内昌郷『源註遺言』について : 天保期の源氏物語研究者の一動向
Author(s)	福田, 安典; 山中, 雅代
Citation	詞林. 2005, 38, p. 57-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

堀内昌郷『源註遺言』について

――天保期の源氏物語研究者の一動向――

福田　安典
山中　雅代

本居宣長が現れて、『源氏物語』の研究や評論が画期的に変化したことは周知のとおりである。その「画期的」や「変化」という言葉には、『源氏物語』研究や評論もしくはそのどちらとも呼べない「『源氏物語』に連なる物」が階層や地域を越えて伝搬したことをも含味されている。それは同時にこの物語がいかに此邦に愛されるようになったかの解であるのかもしれない。

しかしながら、その宣長の影響を受けて、いわば雨後の竹の子のように全国展開し、その過程でいかなる研究が生まれそして消えていったのかと問われれば、明解がないのも現状である。萩原広道の『源氏物語評釈』（文久元年）をもってこの時期の研究を捉えるというのが一般的な理解であろう。

ところが、『源氏物語評釈』以前にも、種々の『源氏物語』研究が為されていた。例えば、平成十六年二月に愛媛大学で開催されたシンポジウム「鄙なる地の『源氏物語研究』―この物語はいかに愛されたのか」における伊井春樹先生の講演資料には「天保年間の源氏物語」として、

天保元年五月　『源氏物語大意』刊
　二年五月　『源氏物語伝来書』書写
　　八月　『源氏物語若草』書写
　　九月　小山田与清『揚名考』稿
　三年七月　『源氏鬢鏡』刊
　　秋　『今様源氏狂歌合』
　　十月　藤原彦麿『源氏物語』
　　十二月　『源氏抜粋抄』
　五年三月　『源語雅言解』
　　六月　成島司直『源氏物語忍草』
　　七月　『源氏物語心廼覚』
　　七月　菅原種文『源語問答』
　　八月　『源氏男女装束抄』
　　十二月　『源註拾遺』刊
　　十二月　『湖月抄別記』刊

六年正月　『源氏物語蜀山抄』写
　六月　玄斎居士『雨夜だみことば』
七年正月　鷲尾隆量『源氏物語』写
　十月　『源氏物語伝』
八年正月　『掌中源氏物語』
　二月　『源氏爪印』
　五月　『源氏百人宝文庫』
　　　　『源氏物語絵尽大意抄』
九年八月　橘守部『源氏百人一首』
　　　　『紫史吟評』
　十一月　『源氏大綱』
十年四月　『雨夜物語品定参注』
　九月　『雨夜滴』
　十月　『七論』
十一年四月　『葵乃二葉』
　五月　『源氏遠鏡』
　七月　『雨夜閑話』
　十二月　藤原彦麿『源氏物語竟宴和歌』
十二年七月　『源氏論議』
十四年九月　『源氏物語紐鏡』

というまとまった数の作品群が挙げられている。今後の精査によって、この作品群の数は増えるであろうから、「天保期」すなわち広道の『源氏物語評釈』以前を、ある年号で切り出してみせただけでも、かくまで有象無象の『源氏物語』関連の書が生まれていたことを知る。そしてそこには近代の源氏物語評論の胚胎とも呼ぶべき作品があるのではないだろうかという淡い魅惑が手招きしている。この伊井春樹先生が示された「天保期」という切り口には、源氏物語研究の次なる地平があると思われる。

　にも関わらず、この時期の源氏物語研究は未着手の状況である。その中にあって、堀内昌郷・匡平親子の源氏物語研究は、重松信弘氏『増補新攷源氏物語研究史』（昭和五十五年、風間書房）、国語国文学研究史大成四『源氏物語　下』（昭和五十二年、三省堂）、岡一男氏『源氏物語事典』（昭和三十九年、春秋社）、伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（平成十三年、東京堂出版）、愛媛近世文学研究会編等を参照されたいが、比較的よく知られている事跡である。

　堀内昌郷の源氏物語研究は、藤井高尚の指導に拠るものであって、その成果は天保期にほぼその原型が完成する『葵の二葉』『底の玉藻』と、それらを要約して出版した『源氏物語紐鏡』（安政六年刊）である。堀内昌郷が単なる愛読者を超えて、研究書までを調製する背景には、藤井高尚に師事したことに加え（傍線筆者以下同）、

　暮近き程にや木かげをぐらきこゝちせらるゝ折しも、これかれとぶらひ来ていとものさびしきころにもあるかな、

せめては心ゆく物語をだにとてなむといふはいとうれしくて（中略）ひとりがいふやう、つれ〳〵と降宵の雨とかあるをりの事も思ひ出らるる夜のさまかな、いでや今宵の品定めには何をかむねとせむ、まづかの源氏のものがたりのことどものいぶかしきふし〳〵をさだめばやと思ふはいかに、おのれとしごろよみ習ふにつけて昔よりのかの大むねのさだを思ふに、勧善懲悪の意なりとせられたる註訳どもはげにあたらざりけりと玉の小櫛を見てしりぬ。

（『葵の二葉』巻一冒頭）

という伊予の地における源氏物語研究グループの存在がある。彼らは、おもに『玉の小櫛』を頼りにし、従来の「勧善懲悪」ではない、新たな読みを『源氏物語』に試みようとしていたのである。ここに「天保期」の源氏物語研究者の一典型を求めたいと思う。この研究グループに所属した者で、名が判明しているものを列記してみる。菅原長好は『源氏物語紐鏡』に序文を記した大三島の人で、右京と称し、大山祇神社関係者である。住居を後楽園と名付けた。年十一にして、備中に至り藤井高尚に師事、更に伊勢に赴き、本居家の塾に入り、名簿を宣長の墓前に捧げたとされている。後に江戸に出て平田鐵胤に師事した。他にはやはり『源氏物語紐鏡』に跋文を記した伊予道後湯神社神主の烏谷美教、松山藩士で海野遊翁門の歌人である石井義郷がいる。

この石井義郷は、堀内よりも早くに『しづ紫』という源氏物語研究書を編み、しかも松山藩士でありながら、『湖月抄』を堀内昌郷の父の長郷から借り出していたらしい（『中島記事』）。つまり堀内家は、昌郷が源氏物語研究を始める先代から、『源氏物語』関係書物を所蔵していた家であり、その書物を中心に研究グループが形成されていったことを知ることができる。

堀内家が所有していた書籍の分析については今後の課題であるが、堀内家の書籍塊集の様子は、安政六年の在京日記である『堀内匡平日記』に散見している。二、三例を挙げてみる（傍線、筆者）。

夫より谷森へ行く。古京之図並古事談借。（四月十八日）

谷森は谷森善臣、京都人、伴信友の門人で古典や陵墓研究に通じた。著書も多い。記事中に見える「古京之図」は愛媛大学附属図書館堀内文庫に『葵二葉附録古図平安京　名所添文』の草稿が現存するので、やはり源氏物語研究のための書籍を当代を代表する学者の谷森から借りているのである。

再真彦を訪。古京の図の写方を託す。すなわち其筆者来りて面会。直に頼む。近藤千尋来会。暫雑談。其時珍書種々目録を見る。是は千尋が持参也。皆見なきのみなら

ず得まほしき書也。　（四月二四日）

真彦は河喜多真彦。やはり京都下賀茂に住し、国学や和歌に通じる。この真彦を通じて写本を入手しているのである。また近藤千尋持参の珍書に舌なめずりする、本に魅せられた研究者の熱い息遣いが聞こえそうである。

夕餐否真彦来。愚管抄、古事談並殿上の岩橋殿の御懐紙、千種殿の御短冊持参。短冊買受る。價一枚に付銀六匁宛。
（四月二十六日）

千種殿は、当時、堂上地下歌人ともに人気のあった千種有功であって、堀内の書籍塊集は単に源氏物語関係には留まっていなかった。

朝、城戸市右衛門手代来。儀式、続古事談、一代要記、四十六士論、字鏡、大内裏考証等持参る。（中略）夫より続古事談校合に取掛る。
（四月二十七日）

城戸市右衛門は千楯と言い、京都の書林の恵比寿屋のことである。宣長に入門し、家業のかたわら鐸廼舎を開き、和歌や国学を教授した。著書も多い。匡平は京都で校合を中心とする古典学を身につけるが、その資料を提供したのがこの城戸千楯であったようである。

以上、堀内家の源氏物語研究は、藤井高尚の指導、研究グループの形成、書籍塊集を背景として進展していたことを確認しておく。

さて、それでは堀内昌郷の源氏物語の方法論を見ていくことにする。まず、

此書よまむには、まづ物語をいくたびも〳〵くりかへし読て大かたそらにおぼゆるばかりになりて後に見るへきなり
（『葵の二葉』匡平序文）

という、素朴且つ骨太な研究姿勢が、この堀内家の真骨頂である。とにかく、全文を暗記するまで『源氏物語』を読むことが鄙なる地の方法論であったのである。ついで、

註さくなくてはうはべばかりの意をだにもたゞにはさとりがたきやうになりもて来ぬるより、いつとなく大むねをもとりあやまれる事とはなれるならむ。さて、しかことをあやまりてひたぶるにもの〻哀のかたにのみ心とられて何心なくもてはやさむには、作主のほいはうづもれはて〻、
（『葵の二葉』匡平序文）

という従前の注釈類の否定に続いて、

> 此源氏物語の註訳めくものよ、こを父がものしたるやうは、かの書はおしなべての物語とはひとしなみならず、作主の心の底にいみじく深く思ひかまへたる事のありて、すべてをむかひ／＼にかき出て、其よしあしを示したるおもむきのあるものなるを、先哲の註さくども其数いと多かれど、皆かゝる所に心のつかれすて（中略） 其説ども大かたうきたる事多くて、あたらぬがちなり。
>
> （『葵の二葉』匡平序文）

> かゝれば是まであり経る註訳とはいたくおもむきのことなるものぞ。
>
> （『葵の二葉』匡平序文）

という思いこみに近い持説への揺るぎない自信が、この源氏物語研究を支えているのである。

また、

> 父が此書かき出しことのもとは上にいひしさまなるも、もとよりかた田舎のすまひにしあれば、書見ることのたつきすくなくていとひろからぬうえに、古しへ学びのかたには年ごろ心をいれてものしたれど、かゝるすぢにはさのみ力をも用ひざりしか、つれ／＼まぎるゝくさはひにかいなでながら折々とう出てよみ見し程に、ゆくりなくひとつ二つ思ひえたるよりのわざなりと聞り。
>
> （『葵の二葉』匡平序文）

という強烈な鄙意識とそれゆえの矜持も、この自信を支えている。この鄙意識の背景には、師である藤井高尚の、

> 松の屋の藤井翁に見せ参らせてそのさだめをこひしに、師のいはく、いとめづらかにもかうがへ出しものかな。まろわかかかりし時より、かの物語を好みていくたびも／＼よみて、みやこ、なにはの人のとへりしにもとき聞せしことたび／＼なり。（『源氏物語紐鏡』所載昌郷跋文）

という奨励の言葉があった。宣長亡き後の物語研究では第一人者であった高尚にしてなお鄙意識と「京、難波」に対する忸怩たる思いがあったのであろうか。とにかく、「天保期」の源氏物語研究の一様相として「鄙の地の源氏物語研究」があったことを指摘しておきたい。

この「天保期」の源氏物語研究者の研究への情熱は執念とも呼ぶべきものがあり、その一端をよく示しているのが、本稿で紹介する『源註遺言』である。

弘化三年、その天寿を全うしようとした堀内昌郷は、枕元に家族を呼び寄せず、源氏物語研究の同志であった烏谷美教を招いた。その途切れ途切れの虫の息から力を振り絞って語るのは、やはり『源氏物語』のことであった。烏谷美教はせ

めての思いとしてその語ることを懐紙に書き留めた。それが『源註遺言』である。その内容は末尾に翻刻しておいたが、愛媛大学堀内文庫本によって書誌を記せば、わずか半紙本の墨付き五丁足らずの内容である。しかしながら、いまはの際にまで『源氏物語』を語ってこと切れる凄惨なまでの執念が「天保期」の源氏物語研究者にはあったのである。

この昌郷の執念は子息の匡平に受け継がれる。匡平は元治元年に松山藩を批判して牢に繋がれたが、その折りの『匡平獄中日記』（昭和十一年景浦直孝「堀内匡平伝」より）に、

> 父翁のものせられし葵の二葉もまだかたなりなればとて、今はの枕上に烏谷美教をよびて「何はしかして」「これはかくして」「所々あやしき所をなほし」「又なにがしの書を見て云々せよ」など、いと詳らかに云ひおかれしを父の志をつぎて其遺言のまゝにせんとおほけなく思ひおこして、此年頃は万のわざを打すてゝ其事のみに打かゝりてあるに、巻の数もいと多く、はた見合すべき書も種々にてはたやすからぬまゝに、思はずも年月をかさぬれど、「いかで己が命の限は露たやまず」とをゝしく思ひはげみて、唐人の寸陰を惜むとのいへる如く、夜ひるとりまかなひてありつるに、今度かく罪にあたりて、生死も定めがたきにつけては、我もしかくて世を去らば誰かは其志をつぎものせん（中略）今我命絶えなば、此二葉もともに枯れなむとものぞとおもへばいと／＼口惜しくて
>
> 摘みおきし葵の二葉ふたゝびも手にもとられぬことのかなしさ
>
> われ死なば見る人もなくいたづらにしみのすみかとなりや果つらむ。

と記している。死を前にしてもかくまで『源氏物語』に心を囚われる姿を何にたとえることができようか。

その昌郷のまさしく絶筆の言葉は「浮舟君の准拠和泉式部か事」であった。すなわち浮舟の人物造型は和泉式部に拠っていると指摘して息絶えたのである。この浮舟と和泉式部の関連については、例えば岡一男氏が浮舟と『和泉式部日記』との関連に言及される際に堀内昌郷に触れているように（昭和四十一年『源氏物語の基礎的研究』、東京堂出版）、近代的評論に通じるような直感でもある。それは、宣長によって啓発され、日本各地にもたらされた未成熟な「天保期」の源氏物語研究者の末期の喘ぎ声として一考の価値はあるものであろう。あるいは、その末期の喘ぎ声は近代源氏物語評論の産声であったのかもしれない。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

（ふくだ・やすのり　愛媛大学助教授）
（やまなか・まさよ　武庫川女子大学修士修了）